

金継ぎの考え方

※オンラインでスライドを用いてお話しています。

本日から5月18日までの約3週間は前期人権旬間です。人権集会では、まず「東京2020パラリンピック」にまつわることからお話をしていきます。

「パラリンピック」とは、障害のある方を対象とした、もう一つのオリンピックであり、4年に一度、オリンピック終了直後に同じ場所で開催されます。「東京2020パラリンピック」が開催されたのは、今から約2年前のことでした。162の国と地域から史上最大の約4400人が参加し、日本は計51個のメダルを獲得するなど大活躍でした。日本選手団の主将を務めたのはこの人、国枝慎吾選手です。車椅子テニスの第一人者で、今大会では、1セットも失わない強さで金メダルを獲得しました。引退後の、令和5年3月には、国民栄誉賞を受賞しました。受賞後のインタビューでは、この受賞は「パラスポーツが認められた証」とお話していました。「すべての違いが輝く街」をテーマとした東京2020パラリンピックの閉会式が行われたのは、9月5日のことでした。大変華やかでメッセージ性のある内容だったのをよく覚えています。私が一番印象的だったのは、国際パラリンピック委員会のアンドリュー・パーソンズ会長の挨拶でした。特に、日本の伝統技法「金継ぎ」に触れた部分です。日本の伝統技法「金継ぎ」とは、どのようなものなのかを先に説明します。金継ぎとは、陶器の欠けやひび割れを漆（木の樹液）や金を用いてつなぎ合わせて直すという伝統的な修復の技法なのです。室町時代に花開いた茶道とともに発展したとのこと。近年の「SDGs」への関心の高まりやクールジャパン（カッコいい日本）の影響で注目度が上昇しています。手軽にできる「金継ぎ用のセット」が売られていて、人気もあるそうです。

パーソンズ会長は、東京2020パラリンピック・閉会式挨拶で次のように述べています。「『金継ぎ』とは、誰もがもつ不完全さを受け入れ、隠すのではなく大事にしようという考え方です」「スポーツの祭典の間、私たちは違いを認め、多様性の調和を見せました」パーソンズ会長は、開催国・日本の伝統技法「金継ぎ」とパラリンピックの精神とを重ね合わせ、結びつけて、私たちに大切なメッセージを届けてくれたのだと思います。

「誰もがもつ不完全さを受け入れ、隠すのではなく大事にしようという考え方」は、昨年度2月の全校朝会冒頭「どんな人にでも苦手な面がある。苦手なことを補い、伸ばす方法があるはずだ」という私のお話と、そのあとにスライドを用いて学習をした内容と重なるのではないのでしょうか。1年生については、先週の金曜日、同じスライドを見ながらお話があったはず。先ほど、国枝選手のお話を取り上げましたが、改めて、国枝さんの他の言葉を紹介します。「車椅子テニスをスポーツとして認知してほしい」「視力が悪ければメガネをかけるのと同じで、僕の車椅子は動くために使う道具でしかない」。金継ぎの「誰もがもつ不完全さを受け入れる」という考え方そのものです。

また、パーソンズ会長の挨拶は「違いを認めること」の大切さにも触れています。「違い」はややもすれば、それが差別とつながる場合があります。「女性差別」「外国人差別」など、私たちが解決すべき課題は山積みです。今日は、このあと全校で一斉に動画視聴を行います。また6時間目は、人権に関わる授業を実施します。

前期人権旬間、皆さん一人一人が人権についてよく考える機会として下さい。